

下位春吉とイタリア＝ファシズム —ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、日本—

藤岡寛己

Shimoi Harukichi and Italian Fascism
On His Relation with D'Annunzio, Mussolini and Japanese Society

Hiromi Fujioka

要 旨

下位春吉は現今の世上ではほとんど知られていない、無名に近い人物である。下位はダンテ研究を目的に1915年秋にナポリにわたり、日本語教師をしながら、現地の文学者や知識人と交流をふかめた。同時に、地元文芸誌や自ら編集・刊行した翻訳文芸誌『サクラ』をつうじて当時の現代日本文学を翻訳・紹介し、イタリアの若き詩人たちに少なからぬ影響をあたえた。他方、第1次世界大戦の伊墮前線へ一兵士として飛び込み、親イタリア日本人としてオーストリア軍と戦う。また、武装せる詩人ダンヌンツィオと知り合ったことで下位のナショナリスティックな革命精神はますます昂揚し、ついでムッソリーニとの接触は下位を完全なるファシストにした。下位は帰国後、ダンヌンツィオ＝ムッソリーニ＝ファシズムとの等号をもとに、戦時体制化をふかめる日本社会にイタリア式ファシズムを伝播・浸透させようと活動するが、第2次世界大戦の敗北によって、下位の行動は無に帰したのであった。本稿は下位のこのような政治的側面における動向を概観する。

Keywords : 下位春吉 Shimoi Harukichi、イタリア＝ファシズム Italian fascism
G・ダンヌンツィオ Gabriele D'Annunzio、B・ムッソリーニ Benito Mussolini

はじめに

日本近代史において、一般に不平士族の反乱あるいは士族反乱と記載される一連の地域的の内乱がある。その萌芽的な様相は各地域で看取可能だろうが、史書の多くはとりわけ九州・山口での士族反乱をとりあげる。時間軸に沿って列挙すると、佐賀の乱(1874年2月-4月)、神風連の乱(1876年10月)、秋月の乱(同年10月-11月)、萩の乱(同年10月-12月)、そして西南戦争(1877年1月-9月)である。そのなかでも、両陣合わせて13000人以上の戦死者をだした西南戦争は、国民国家の成立をみた明治維新以降、現在に至るまで文字どおり最大の内戦となった。

上記の反乱のうち、秋月の乱を描いた『秋月黨』という一書がある^{*1}。これは1925年、著者水舟・川上市太郎が「秋月党挙兵50周年」を記念して出版したものである。憂国の一念をもって維新政府の「君側の奸」に天誅

を加えようと、肥後の神風連、長門・萩の前原(一誠)派そして筑前の秋月党は三角連合をつくった。しかし、綿密な計画性や連動性に欠け、それぞれの勢力も微弱だった。また、攻撃準備も整わず、戦略・戦術的にも成熟していなかったこの連合は、翌年の文治政府を揺るがす薩摩・西郷による大反乱の露払い的な役割を果たしたとはいえ、結果としては維新の武断派が歴史舞台から払拭される前段となった。

秋月事件の一部始終を実行者の側から詳細に描写したこの『秋月黨』の冒頭部分で、筆者の関心をひく2名の人物が題字を残している。ひとり「義烈」と書いた頭山満とうやまみつる(1855年-1944年)であり、他方は「興国乎死乎」と題した下位春吉しもいはるきち(1883年-1954年)である。頭山は、政界の黒幕としての裏面史をふくめ、明治中期から昭和初期の日本政治に隠然たる影響力をもちつづけた国家主義者・アジア主義者として、また右翼団体玄洋社総帥として著名である。頭山は西南戦争が勃発するとた

だちにこれに呼応して拳兵した福岡・黒田藩士の一人として福岡の変にくわり、捕縛・投獄された経歴をもつ。書中にもみられるように、秋月党と福岡党には浅からぬ関係があったことを考えれば、頭山が同書に「堅き正義心」を意味する題字「義烈」を寄せたことも頷けよう。

ではなぜ、下位春吉の題字が頭山のそれに伍して掲載されていたのか。現在、世間の知名度において、頭山と下位とでは雲泥の差があろう。当時の下位にしても、前年12月に約10年におよぶイタリア滞在から帰国して1年足らず、この間、日本へのイタリア＝ファシズム紹介者として執筆や講演を精力的に手がけ、売り出し中ではあっただろうが、頭山に比すればなお知名度の差は歴然だった（もうすこし時が下れば下位の名も知られるようになるであろう）。

『秋月黨』の刊行直前、秋月では「明治9年戦役死者50年祭典」（1925年10月27日）が催され、「式半ばに各地の講演に寸暇なき下位春吉参拝して先輩を弔」^{*2} ったという。つまり、下位は秋月拳兵50年祭の式典に列席していたのである。この説明はそれほど困難ではない。1907年、東京師範学校英語科学生の春吉は24歳で下位家（東京日本橋）の婿養子となったが、旧姓井上、夜須郡日向石村（その後、夜須郡上秋月村、秋月町、朝倉郡、甘木市をへて、2006年3月より福岡県朝倉市）の生まれである。もちろん、年齢からみて、下位は秋月の乱を実際には知らない。だが、下位の実父井上喜久蔵は多少とも乱と関係があった。

秋月藩士255名によるこの義挙では、捕縛以前に7藩士が自害し、2土が「朝憲紊乱兵器聚衆官兵抵抗殺害」の罪により「除族ノ上斬罪」、19土が除族懲役、124土が除族、1土が贖金に処された。また、175土は「一時凶徒の招聚に應ズルモ入隊セズシテ解散スルヲ 咎ノ沙汰ニ及バザル者」として放免され、その他63土は「不審ニ係リ無罪」となったが、上記「咎ノ沙汰ニ及バザル者」と申しわたされて処罰を免れた者のなかに土族井上喜久蔵の名がみえる^{*3}。さらに、喜久蔵は『秋月黨』巻末の「考證、文献」章の協力者に「秋月党福岡党実見者」（81歳）として記載されている^{*4}。もっとも、下級武士階級にとって平均的なおよそ30石程度の俸禄をかつて受けていた喜久蔵^{*5}も維新後の没落士族の例に漏れず、窮乏の果て秋月を出て生活の場を山向こうの筑豊炭田にもとめた^{*6}（具体的には、旧鞍手郡、現在の直方の下境らしい^{*7}）。経済的困窮のなか、北九州八幡の名門旧制東筑中学を卒業し、東京に向かった秋月家四男坊の春吉にとり、秋月来訪は生地への帰郷であった。

以下、本稿では、下位の著作を主たる典拠とし、ダンヌンツィオおよびムッソリーニとの関係に注目しつつ、下位の政治的容貌と1920年代半ばから40年代前半の日本で

の活動をたどり、イタリア研究者 (italianista) でありファシズムの宣伝家・普及者 (propagandista・propagatore) である下位をとおして日本とイタリアの近現代政治史の一側面を考察する。

1 下位と大戦とダンヌンツィオ

下位春吉は文学者と政治的プロパガンディストという二つの顔をもっていたといえる。下位はある時点で自らの人生を二分した。前半生すなわち文学者としての下位について、児童文学事典はつぎのように説明している。曰く、「東京高等師範英語科さらに専攻科卒。東京外語大イタリア語科〔夜学〕卒。〔略〕1915年〔正しくは1911年〕、東京高等師範学校に葛原しげるとともに講話・口演童話の研究会『大塚講話会』を創設。その理論書として『お凧の仕方』（1917年2月、同文館）を執筆した。のちに童話教育・教室童話といわれる傾向は、この本によって現れた。〔略〕同書の末尾の例話『ゴンザ蟲』は実演1時間を超える長編で、下位の代表作である。その技法の出所は明治期からの雄弁術・演説法」^{*8} だった。当時の加納治五郎校長に願い出てつくった大塚講話会で、下位は「講話会のお父さん」と呼ばれていたという^{*9}。国語教育学者の倉澤栄吉は、「わが国の口演童話の歴史のうえに、本書〔『お凧の仕方』〕が正当に位置づけられていない」として、大正から昭和戦前期における「口演童話の全盛時代を迎えるための布石として、出発進行の合図をした書物として、高い評価を受けるべきものである」と主張し、口演童話に関する戦後の記述に下位と『お凧の仕方』の名が見えないと批判する^{*10}。

1915年秋、下位は妻子を残して単独、日本を出航し、ダンテ研究のため単身ナポリに入った^{*11}。王立東洋学院 (Reale Istituto Orientale、現在のナポリ東洋大学) で日本語を教えるかたわら、現地で知己となった青年の詩人マローネ (Gherardo Marone、1891-1962)^{*12} とかれの編集する文芸誌『ラ＝ディアーナ』 (La Diana、1915年1月 - 1917年3月) をつうじ、クローチェ (Benedetto Croce) のほか多くの知識人と交流した^{*13}。また、マローネとの共訳編で、同誌に与謝野晶子の詩11編を手はじめに、泉鏡花の短編や与謝野鉄幹、吉井勇など明星派歌人の作品を訳出紹介している。さらに下位はみずから、雑誌『サクラ』 (Sakura) (1920年 - 1921年、全5冊) を刊行し、樋口一葉・国木田独歩・森鷗外・土井晩翠・二葉亭四迷など明治以降の現代日本文学の翻訳を精力的におこなった^{*14}。近年、ナポリ滞在時の下位の文学活動にかんする研究が日伊両国で盛んになっている^{*15}。

滞在先のナポリで上記のような活動を積極的におこなっ

ていた日本語語学教師・文学研究者＝下位と、軍事的・政治的行動者＝下位との分岐点となるのが、第1次世界大戦に際してみずから志願したイタリア軍への参加であり、それ以上の精神的衝撃となったのが19世紀末から20世紀初頭の当時にかけて一世を風靡していた詩人で小説家・劇作家のダンヌンツィオ（Gabriele D'Annunzio、1863-1938）との邂逅だった。

第1次大戦を中心的に描いた下位の書物には、イタリア語版とこれをもとにした日本語版の2冊がある^{*16}。その日本語版（『大戦中のイタリア』）によると、「欧州大戦乱中、私〔下位〕が伊国の戦線に走ったのは、1918年の夏であった。ダンヌンツィオが夙都ヴィエンナ〔ウィーン〕の空に大飛行を執行してから間もない頃」^{*17}だったと書かれていることから、下位がイタリア軍に義勇兵として参加したのは大戦末期に近かった。つまり、前年10月から11月の伊墮戦線におけるカポレット戦で歴史的な大敗を喫して瀕死の状態のイタリアだったが、連合国からの増援もあり、6月にピアヴェ川戦域で勝利して以降は優勢に転じ、ヴィットーリオ＝ヴェネトでの最終決戦（10月－11月）に備えている頃であった。

駐イタリア日本大使館とイタリア政府との取次役を自任していた下位は、カポレット戦後に総司令官に就任する將軍ディアズ（Armando Diaz）と転地療養先で知り合うと、將軍からイタリア戦線訪問をうながされ、新聞社の通信員資格で派遣されたようだ^{*18}。だが、記事を配信するだけでは物足りなかったのか、まもなく、「第2の祖国」イタリアのために戦闘行為に参加するようになる。

下位は、「決死隊の軍服を貰って第一線に出」、「激戦地の一つとして、丁度日露戦争の旅順に相当するグラッパの山地戦線」^{*19}に行ったという。決死隊とは突撃隊とも訳されるアルディーティ（arditi、原意は大胆、勇猛果敢な者たち）のことで、最低限の武器を装備して単独あるいは少人数で敵陣に攻撃をしかけたり、斥候としての任務を負った特別編成の兵士である。いわば、もっとも血の気の多い軍人たちだった。このアルディーティは大戦後、ファシズムの源流であるイタリア戦闘ファシの主要な構成部分となった^{*20}。よもや下位が、非常に厳しい訓練を要するアルディーティに正式に任用され、軍事作戦で本格的に登用されたとは考えられないから、それは一種の名誉的職位としてであったろう。

ところで、下位にアルディーティの軍服を渡した人物は、ガヴィツリヤ（Enrico Caviglia、1862-1945）という名の陸軍元帥（Maresciallo）で^{*21}、当時はサヴォイア軍団評議会（Consiglio dell'Ordine Militare di Savoia）の臨時評議員でもあり、アジアゴやピアヴェ川戦線では総司令官として指揮をとった。ガヴィツリヤは前線地域

のカルソで偶然、伊墮戦線の戦闘現場にいる日本人＝下位を見つけて驚く。というのも、かれはかつて駐日イタリア大使館付特命武官を経験し、日本軍に同道した日露戦争の戦場で近代的な戦術を学んだ、多少の日本語も解す親日派だったからである。カヴィツリヤは、自軍兵の士気高揚のために日本兵の優秀さを話してくれと下位を最前線の塹壕に招く^{*22}。下位は各地のアルディーティから大歓迎をうけた。「私が彼らに日露戦争の話をする、彼らは非常に興奮して万歳！万歳！と叫び、まるで爆弾片手に突進していきそうだった」^{*23}と語る下位は、ときにアルディーティに空手を教えることもあった。

下位は、ダンヌンツィオとの初対面の日付を書いていない^{*24}。だが、上ですこし触れたように、1918年夏（8月9日）にダンヌンツィオが8機編成の飛行隊「悠々閑々隊」（1機は撃墜される）を組んでウィーン上空に飛来し、「我等は破壊のために戦はず、我等は殺戮のために戦はず」と書いた3色のピラをばらまいた「大飛行」の成功から日も浅い時期、イタリア戦線に向かう前、下位は「小説家のベルトラメルリ」の案内により、パドヴァにあった総司令部を発ってヴェネツィアのサンマルコ広場に近しいダンヌンツィオ宅を訪問したと思われる^{*25}。もっとも、1933年3月に日伊協会の主催で開かれた「ダンヌンツィオ忌5周年記念講演会」の講演では、「戦線で相識った」と述べている^{*26}。これは少し脚色されたものいえるが、特殊警戒区域として入城が厳しかったヴェネツィアを「戦線」にある拠点基地と見なすならば、それも必ずしもまちがいはないだろう^{*27}。

ともあれ、はじめて訪れたその日に、下位はダンヌンツィオから聖ニコロ（San Nicolò）の飛行場^{*28}に一緒に行こうと誘われ、自動艇でヴェネツィアの大運河カナル＝グランデ（Canal Grande）を抜け、飛行場へと随伴した^{*29}。その後、下位はアルディーティのひとりとして伊墮戦線で活動する。グラッパ山・ピアヴェ川の戦いをへて、ヴィットーリオ＝ヴェネト戦ではイタリア軍第3軍に属した。11月3日にヴィッラ＝ジュスティでの停戦協定が結ばれたが、その日はトレント占領に加わっていた^{*30}。下位は、第1次大戦の結末をみてナポリに戻った。それから2箇月もしないうちに、「いよいよ戦争が済んで、1919年、大正8年の正月に、『日本へ飛行機で行くからヴェニスまでやって来い』という〔ダンヌンツィオからの〕通知を受け取った」^{*31}（傍点引用者）のである。

ダンヌンツィオは合計4度の日本への渡航を図った。最初は若い頃に船でエジプトまでいったが失敗したという。2度目の計画の端緒が上記メッセージである。これは、南シベリア－モンゴル－満州－朝鮮のルートをとって、1日2000km、1週間で遂行の飛行計画だったが、予定

の飛行士がバリ往復の試験飛行中にアルプス山中の氷河地帯に不時着、凍死して中止となった。3度目は、中国トルキスタン - サマルカンド - 北京 - 奉天（瀋陽）の上空を通過する大陸横断という途方もない計画だったが、未遂に終わる。4度目の日本への到達計画は、当時の首相ニッティ（Francesco Saverio Nitti）が天敵ダンヌンツィオをイタリアから厄介払いするために、ローマ - 東京の飛行計画を支援したものである。しかし、ダンヌンツィオは、連合国によるフィウーメへの占領的な駐留、とりわけ米国の資本介入にたいする懸念と怒りとで飛行計画を最終的にとりやめ、下位に飛行の成功を託すが、ときの伊集院彦吉特命全権駐伊大使（のち、第2次山本内閣外相）はダンヌンツィオの訪日が重要なのであり、下位単独では意味はないと断じ、計画はまたしても、そして最終的に水泡に帰した^{*32}。

第1次大戦後の1919年6月下旬から7月上旬、フィウーメを軍事占領していた連合国中、仏伊両駐留軍のあいだで軍事衝突が発生すると、合同調査委員会は駐留イタリア軍の大幅削減を決定した。だが、退去をしいられたイタリア軍兵士の一部から、ダンヌンツィオを指導者としてフィウーメ奪取のために決起しようとの声がかかり、9月11日夜、ダンヌンツィオはロンキに集まった義勇兵（legionari）とフィウーメに向かう。これは歴史的にロンキ進軍（Marcia di Ronchi）と呼ばれ、ファシストのローマ進軍（Marcia su Roma）に先行するものと見なされることもある^{*33}。翌12日、ダンヌンツィオはアルディーティを含む2500 - 2600人に膨らんだ義勇兵とともにフィウーメに入城した。この日から1921年1月18日に退去するまで、ダンヌンツィオは司令官（コマンドンテComandante）として、フィウーメに君臨する。

下位春吉がロンキ進軍に参加した形跡はない。しかし、以下にその大略を紹介するダンヌンツィオの発言から、1920年2月1日に下位がフィウーメ入りしたことがわかる。発言は、ダンヌンツィオが下位の歓迎正餐会を翌2日に司令部で開き、テーブルについている一同に下位を紹介したときの挨拶（「東方よりの客人への挨拶」）である^{*34}。なお、この挨拶は、数日後（2月4日）、『イタリアの監視塔』（*La Vedetta d'Italia*）というフィウーメの地元紙に全文掲載された^{*35}。

今晚、イタリアのフィウーメのわれらのもとに来てくれた極東からの客人に敬意を表したい。[略] 日出ずる国の使者（messaggero del Sol Levante）を、このわれらの戦渦の食堂で歓迎したい。[略] 長き飛行のため私は彼の地 [日本] へいけなかったが、下位春吉が長き飛行よりここにきてくれた。ノ昨日までの下位はその小柄な体躯の胸におおきなイタリアの心をもつ

ていたが、本日はフィウーメの星のもとにはげしく燃えるフィウーメの心をもつ。[略] カポレット戦の大敗やイタリアの苦しみ、苦難、流血、絶望の日々とをふたりして語ったことがあるが、下位よ憶えているか？ 下位が流す二筋の涙をみて、すぐに我らは兄弟であると思った。その心はわたしを開かせた。[略] アジアの蘇生、聖なるアジア、広大で至高なるひとまとまりの地域を革新する突然の若返り。その偉大さにおいていかなる歴史的な事件がそれに匹敵しようか？ [略] 中国（Figlio del Cielo）とロシア（Cesare slavo）を打倒した人々は、現在、全征服地をもとめる。[略] かれらはアジア支配のみならず、全太平洋に向かう。その力はフィリピン、インドシナ、蘭領インド、そしてハワイを見ずえるのだ。「欧州は老いぼれた」という大隈 [重信] の言があるが、ヨーロッパは老いぼれてはいない。ヨーロッパの旺盛な情熱は青年の情熱でしかありえず、より自由でより高いその出現への渴望でしかありえないのだ。ノ大なる情熱はどこでよりつよく脈打つのか？ フィウーメにおいてである。どこで最新の生のかたちが構想されはじめるのか？ フィウーメを囲むカルナーロ [湾] のこの岸においてである。われらは、イタリアの東の港フィウーメから、極東の光差す国に挨拶をおくろう。[略] 今度はわれらの番だ。[主は] 近くに在り（Prope est.）。アララー！（Alalà!）

フィウーメ事件にかんするダンヌンツィオの発言を収めた別の著作には、発言とともに次のような短い解説がある。「フィウーメの壮挙（Impresa fiumana）はイタリア政府や連合国から誹謗されたが、政治的的局面や詩人 [ダンヌンツィオ] の国際的名声によって遙か遠い国々には関心と同情を引き起こした。ノこの時期にフィウーメを訪れた多数の外国人のなかでも日本の詩人下位春吉を記憶すべきである」と^{*36}。占領したフィウーメではアルディーティが多数いたため、下位の仲間意識もたかまったことであろう^{*37}。

ダンヌンツィオは、世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパの文壇の寵児となり、第1次大戦に際しては参戦運動の象徴的存在としてイタリアの世論形成に多大な影響をおよぼし、大戦中は塹戦艦の停泊するブッカリ湾への攻撃作戦や遠征飛行によるウィーン上空からの挑発的なビラ散布といった派手なパフォーマンスでイタリアの戦争を象徴した。大詩人（Poeta）や武装せる詩人（poeta armata）、あるいはダンテ（Dante Alighieri）に似せてか詩聖（Vate）との異称もあたえられていた文豪ダンヌンツィオは、下位にたいし破格の扱いで応接したのである^{*38}。フィウーメ問題についてここで詳説でき

ないが、ナショナリストを含む一部のイタリア国民がフィウーメはイタリアに帰属すると主張した根拠もまた、ダンヌンツィオが嫌った米国大統領ウィルソンの14箇条に流れていた民族自決論と同じイデオロギーであったといえる。すなわち、フィウーメは歴史的・民族構成的にもイタリアの一部であるという理由からだった。ダンヌンツィオはフィウーメのナショナリズムとともに、他国の圧制に苦しむ諸民族を救済する普遍的な国際都市 (Città universale) フィウーメのイメージを発信しようとした^{*39}。それゆえに、さまざまな地域で民族の解放と独立を欲する諸民族の活動家がフィウーメを訪れたのである。日本の武装せる詩人 (とイタリアではしばしば紹介された) 下位春吉もそうした活動家たちのひとりとしてフィウーメに迎えられたといえるだろう。上引の下位への歓迎挨拶にも、圧制者の中国とロシアと両国に戦勝した弱小国日本という構図がみとめられる (しかし、恨むべきは、そうした民族自決精神の称揚とは裏腹に、日本もまた膨張主義的な帝国主義への道を歩むであろうことをダンヌンツィオが期待しているかように聞こえるのである)。

以上、特異な日本人ファシスト下位春吉の思想や行動を知るため、本章ではナポリの東洋学院日本語講座の語学教師とは別の下位を、イタリア軍アルディートとしての第1次世界大戦への参加、およびかれのダンヌンツィオ観^{*40}をとおして探ったが、最後に、この時期の下位にかんじていくつかの疑問を指摘しよう。

まず、下位のフィウーメ滞在期間はどれくらいだったのか、つまびらかでない。ダンヌンツィオによるフィウーメ占領とは、1919年9月12日から1920年12月24日のジョリッティ (Giovanni Giolitti) 政府の海上砲撃によるカルナーロ＝イタリア執政府 (Reggenza Italiana del Carnaro) 崩壊、そして翌1921年1月のダンヌンツィオの退去までのおよそ1年4箇月ほどをいう。先述のように、下位が1920年2月1日にフィウーメ入りしたあと、いつまで現地にとどまったのか、詳細は不明である。だが、下位がナポリで刊行していた『サクラ』第1号の発行が1920年6月10日であり、以後1921年春まで断続につづけられた同誌の編集・発行作業^{*41}にかなりの時間を要したであろうことを考慮すれば、下位のフィウーメ滞在は、たとえ複数回の訪問があったにせよ、それぞれ短期であったと推測される。

つぎに、下位が果たしてダンヌンツィオの作品にどれほど親しんでいたのかについても不明である。ダンヌンツィオを描いた下位の多くの文章には、その作品論や文学論、芸術論がまったく顔をださない。下位は自己との交友とダンヌンツィオの字義どおり戦闘的側面や武勇のみを伝え、その文学的評価にかんする記述をことごとく

回避している。当時の日本ではすでにダンヌンツィオ文学の研究が賑わっていたため、あるいは自国では文学者として認められていないゆえに、この分野においては自分の出る幕ではないと判断したのであるか^{*42}。

第3点目は、下位はダンヌンツィオのフィウーメ占領時における内部状況とその変化を理解あるいは認識していなかったのではないかという疑問である。下位は、当時のフィウーメの社会状況をほとんどまったく描写していない。上にもすこし触れたが、^{コマンダンテ}司令官ダンヌンツィオ統治下のフィウーメ執政府は、イタリア＝ナショナリズムの象徴、および被抑圧諸民族解放運動の発信地・拠点という二つの意味を帯びていた。ところが、それは一種の内部矛盾でもあった。さらに、1920年1月のデアンプリス (Alceste De Ambris) 首班内閣の成立以後、フィウーメのサンディカリズム的革命路線が明確になる。ある意味において、フィウーメ占領を歴史にとどめさせる重要な事項として、デアンプリスが作成した、当時において世界的にももっとも急進民主主義的なカルナーロ憲章 (Carta del Carnaro) があるが、これへの言及もない^{*43}。こうした、フィウーメのイデオロギーの実情 (右派・穏健派から左派・革命派へのイデオロギー的転換) にかんし、下位はあまりにも無自覚・無感覚だった。

最後に、これは次章とも関連するが、ダンヌンツィオ＝フィウーメ占領からムッソリーニ＝ファシズム (運動) への歴史的流れをきわめて単純かつ直線的に捉えたのではないかという疑問である。つまり、フィウーメ左派も左派アルディーティ (さらにはファシスト左派) についてもいっさい言及しない親伊家 (filoitaliano) の下位は、無邪気にもダンヌンツィオ - ムッソリーニ - 日本軍国主義 = 「ファシズム」を一直線に結びつけた。こうした、単純明快でわかりやすい論法ゆえに、下位の発する戦意高揚の熱弁は、帰還した戦前・戦中の日本で一般的な聴衆や読者に受け入れられたのであろう。

2 ムッソリーニ、ファシズム、日本

第1次大戦終結直後のイタリア自由主義政府は、戦後経済不況の暗雲が覆うなか、議会にあっては社会主義政治勢力の伸張やキリスト教政党人民党の成立とその反政府的立場によって、議会外ではヴェルサイユ講和体制にたいする国民的な反発、工場・農場での労働運動の激化のために苦境におかれた。そのような社会的停滞の空隙を縫い、ダンヌンツィオは「骨抜きにされた勝利」 (vittoria mutilata) の合い言葉を造出しつつ、フィウーメ占領を断行した。占領敢行の報に国民は喝采し、快拳として溜飲をさげた。しかし、フィウーメ占領勃発より半年近くまえの1919年3月下旬、ムッソリーニはミラー

ノでファシズム運動の狼煙をあげていた。すなわち、短い「ダンヌンツィオの時代」の開始以前、すでに「ムッソリーニの時代」の地固めがはじまっていたのである。

ジョリッティ政府は、オーストリア＝ハンガリー二重君主国の解体にもなって誕生したセルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国（のちのユーゴスラヴィア）と1920年11月にラパッロ条約（Trattato di Rapallo）を締結し、フィウーメを自由都市である分離区域（Corpus separatum）とすることで合意した。ムッソリーニもイタリア外交の手詰まり状態を打開する手段として、同条約を支持する^{*44}。イタリア政府はフィウーメ執政府に最後通牒（ultimatum）を差したが、ダンヌンツィオはこれを拒否し、血のクリスマス（Natale di sangue）と呼ばれる政府の一斉砲撃をもって占領都市フィウーメは崩壊した。そして、司令官ダンヌンツィオの時代も終焉をみた。

フィウーメ占領期、外国人である下位は、陸上封鎖されているフィウーメに拘束されることなく出入りできた。「フィウーメにおける私の任務はフィウーメとヴェニスとの連絡で、決死隊の黒紐隊に属し、封鎖線を突破することが私の仕事でした」^{*45}、あるいは、「フィウーメの籠城中ダンヌンツィオが国家の為に戦って苦しみつづける時、軍用金を集めて居たのがムッソリーニで、陸海軍の封鎖線を突破してその連絡を取って居たのが私でと、妙な腐れ縁があったのである」^{*46}と下位は証言する。戦後イタリアを代表するジャーナリストで知日派でもあるモンタネリ（Indro Montanelli）は、1952年1月、失意の日々をおくる下位へのインタビュー記事で、つぎのように記録している。

フィウーメでダンヌンツィオは下位を軍警備の名誉伍長（caporale d'onore）にした。下位はこの大事業にとってもっとも有益な選り抜きの人物だった。なぜなら、下位は包囲された都市フィウーメに出入りできる、おそらく唯一の人物だった。イタリア政府によるフィウーメ封鎖での前線を通過するたびにカラピニエーレ（軍警察）から検束されたのだが、そのとき包囲軍のあのカヴィッリヤ將軍 [!] が下位の即時釈放を命じたからだ。こうして、フィウーメにいる詩人とミラーノのムッソリーニ間の連絡を確保するという任務をひとりの日本人に委ねるといってもきつと起こったのだらう。ダンヌンツィオはムッソリーニに下位を遣り、「日出ずる国（Sol levante）の英雄よ、貴公はムッソリーニのなかに貴国の伝説であるサムライを認めるであろう」と言ったが、そのことからダンヌンツィオは侍についてたいして詳しく知らなかったことがわかる。サムライに似ても似つかないムッソリーニは両腕

をひろげ、日出ずる国の英雄を抱擁した^{*47}。

さらにこのインタビューのなかで、下位は、「あの日からわたしはずっとムッソリーニの近くにいた。ムッソリーニのところには自由に入ることができた。1935年 [これは下位の記憶違いか、もしくはインタビューの誤記。下にみるように、下位の帰国は1933年である]、ムッソリーニはわたしに、帰国してイタリアの宣伝をしてくれと提案した。このことでムッソリーニに感謝する気にはとてもなれない。それはイタリアを捨てる、まさに20年間をおしまいにする瞬間をわたしに承諾させたのだ。あのときの様子をいまも思い出せる」^{*48}と語った。

1915年秋に単身イタリア半島に上陸した下位は1924年12月に帰国する。その後、25年・26年に1度ずつ訪伊し、さらに1927年秋から33年4月まで、ローマ大学に新設される日本文学講座担当のため一家でローマに移ったが、結局講座はできずこの任にはついていない。1933年5月に帰国してから、再度イタリアを訪れることはなかった。ローマ滞在時代の下位の動向についてはよくわかっていない。日本大使館の仕事（「私設大使」）と自己の研究をつづけていたとみられ、あるイタリア人日本研究者は、ローマの研究者の集まりで下位が博識をもって日本古典文学の解説に熱弁をふるっていたことを記憶しているという^{*49}。

日本で下位は、1924年から1927年までの一時帰国の期間と、1933年から日本の敗戦までの期間、おびたしい量の著作と講演をこなし、また国家主義団体活動に精力的に取り組んだ。イタリア＝ファシズムの伝道者として、下位は講談師然たる名調子で聴衆を魅了した。若かりし頃、みずから旗揚げし、運営に労を惜しまなかった大塚講話会時代の成果を誇示するかのようである。時間的な長短や内容上の濃淡はあるものの、ファシスト＝下位の講演録はいずれも似たような内容だった。すなわち、第1次大戦における自身の経験とフィウーメ占領にみるダンヌンツィオの素晴らしさ、詩聖と自身との親密な交際、ムッソリーニ＝ファシズムの活力と偉大さを、文字どおり立て板に水の息もつかせぬ能弁で演説をつづけた。

自分とムッソリーニとの関係について、「私はフィウーメの戦争中から知ってゐる。戦争中のあの男 [ムッソリーニ] が新聞社長でありながら志願して出て、一兵卒から1年余、軍曹にまでなって死に掛つた。私は病院に行って居た」^{*50}とファシズム運動の開始以前からの知り合いであると書き、「始めてムッソリーニを紹介し、ファツショの運動を日本に紹介したのは、恐らく私が始めてだと思つてをります」^{*51}とも誇った。くわえて、1929年にはムッソリーニの主要演説29本を翻訳した^{*52}。しかし、ムッソリーニ全集（全44巻）中、下位の名が登場するの

はただ一度しかない。それは1922年9月13日付『イタリア人民』(Popolo d'Italia)の「ナポリに住む偉大な日本人詩人の下位春吉の電報で事前に知らされ、ミラーノの日本領事館の越田佐一郎領事によって紹介された日本の3大自由主義政党の代表が『イタリア人民』紙本部にいるムッソリーニを訪問した」という記事である。記事はつづけて、代議士たちはファシズムの今後の展開や即効力にかんする情報を尋ね、日本でのファシズムの評判がすばらしいこと、さらに、日伊間の知的・経済的交流が活発になっており、東大にはイタリア文学講座も開設されてイタリア文学の古典が教えられ、すでにデアミーチス(Edmondo De Amicis, 1846-1908)やフォガツツァーロ(Antonio Fogazzaro, 1842-1911)やダンヌンツィオといった現代作家は翻訳も多く、日本の知識人の間ではよく知られているなどとあった^{*53}。ごく断片的な史資料だけで即断するのは禁物だが、この記事により、ムッソリーニにとっての下位の役回りがある程度理解できるのではないか。ローマ進軍直前の緊迫した重要な時期であるとはいえ、下位はファシズム体制成立以前の些末なトピックの片隅に顔を見せていたにすぎなかった。

これに反し、日本での下位は、異様ともおもえる熱情に駆りたてられるように、ファシスト＝下位のイメージをきわだたせながらムッソリーニとファシズムを称揚し^{*54}、各地を喧伝して回った。下位の講演の熱気を臨場感をもって余すところなく伝えるのが、1940年5月に帰国して間もなく開いた群馬県桐生市での演説の評判を聞いた講談社(当時は大日本雄辯會講談社)が社をあげて社員向けに開いた7月の演説記録であろう。それは、大衆にたいする軍国主義・翼賛体制思想の啓蒙・昂揚戦略に相当の戦争犯罪的貢献をなした同社の看板雑誌『キング』別冊として「下位春吉氏 熱血熱涙の大演説」のタイトルで載録された。その大目次には、「老文豪ダンヌンツィオの奮起」、「愛国主義の青年運動」、「ファツショとは何ぞや」、「ローマ進軍」、「巨人ムッソリーニ」、「世界に漲るファツショ運動」などの言葉がならぶ。

この冊子に限らず、下位が時局の解説をまじえながらファツショ・ファシズムについて聴衆や読者に訴えた内容は、おおよそ以下の諸点にまとめられるであろう。

- (1) ダンヌンツィオのフィウーメ占領に継続するファシズム運動^{*55}は愛国主義青年運動であり、青年が国家建設運動の中核をなす^{*56}。
- (2) 欧米帝国主義列強とそれが運営する国際連盟を断固拒絶する^{*57}。
- (3) ファシズムは極端な国家主義であり、自由主義と民主主義、共産主義、国際主義、平和主義を否定する。
- (4) 個人よりも集団行動が重要である。軍国主義的・

軍隊組織的な教育編制を推進する(「男子須く危険に生きよ」)。

- (5) ファツショ精神はムッソリーニの精神であり、日本の武士道精神と同一である^{*58}。

それでは、ファツショ精神とは何か。下位は、第1条、我等の精神は祖国・本分・規律。第2条、我等は義務ありて権利なし。第3条、我等は実行ありて議論なしであるという^{*59}。また、ファシズムがイタリアに出現した遠因・近因を、第1次大戦での死の苦しみ、講和会議での列強による虐め、政府の失策、共産主義の跋扈だと見^{*60}、このような圧迫要因ゆえにイタリア国民が蹶然奮起して祖国意識に燃えた事実にまなび、満州事変後の日本の逆境を突破せよと檄をとばした^{*61}。

下位はファシズムの産業や労働政策にかんしても発言している。たとえば、第1条末尾で「(イタリア国民は)ファシズム国家で全面的に実現される精神的・政治的・経済的な統一である」(La Nazione italiana E' una unità morale, politica ed economica che si realizza integralmente nello Stato fascista.)と宣する労働憲章(Carta del Lavoro, 1927年)を評価し、同憲章が規定するファシズム国家の失業対策、家族扶助金、傷害保険、社会施設、住宅、「労働の後」(Opera Nazionale Dopolavoro)^{ドポラヴォーロ}^{*62}などについて解説した^{*63}。協同体国家(Stato corporativo)^{スタート=コルポラティーヴォ}を前提とする労働憲章は、先述したように、フィウーメ占領期すでに革命的サンディカリストのデアンプリスによってより先進的に提起されたものであったが、下位は知らなかったようだ。また、イタリアの農業政策についても、協同体国家にもとづいた団体農業の奨励や低利資金制度や農業巡回講座制度、農業の電化をたかく評価した^{*64}。結局、協同体国家体制は実現せず、下位の称讃する経済社会・労働の各領域におけるファシズムの革命的な改革は頓挫し、イタリア＝ファシズム全体主義は日(天皇制軍国主義)・独(ナチズム)枢軸諸国とともに第2次大戦の敗戦によって壊滅する。1943年7月のファシズム大評議会はムッソリーニを罷免・逮捕し、あらたに成立した元帥バドッリョ(Pietro Badoglio)軍事政権は9月3日に連合軍と休戦協定を結んだ(それから日本の降伏・敗戦までのおよそ2年間、下位の心境はいかなるものであったろうか)。他方、ドイツ軍に救出されたムッソリーニは北イタリアに逃げ延び、社会共和国(サロ共和国)を建設するが、1945年4月、スイスへ逃亡中にパルチザンに捕らえられ即時処刑される。死体はミラーノに運ばれ、市内のロレート広場で吊り下げられた。ファシスト＝下位の夢もついでた。

では、一時帰国した日々、また戦時色が日々濃厚になっていた最終帰国後、下位は日本において著作や講演活動

のほか何をしたのか、探ってみよう。

1932年刊行の愛国運動関係書には、下位が創始した興国青年党が次のように紹介されている。興国青年党は下位が一時帰国していた1924年末から1927年夏の期間に結党・解党をみたようである。以下が同党の教条であった。

- 一、皇室中心主義を根本とし祖国の独立強大を計るべし。
- 一、百の議論は一の実行に如かずと知るべし。
- 一、進んで戦を挑む勿れ、若し敵の襲撃を受けたらば全力を尽して自己を防衛すべし。
- 一、己れの力を充実して己れを強くすることを計れ。
- 一、長上に対しては絶対の服従をなすべし。
- 一、動作は敏活なれ。
- 一、一旦議決したる以上は各自の個人的意見を棄て多衆の決したる処に従ふべし。
- 一、質素、著実、勤勉剛健、快活なるべし、艱難欠乏に堪ゆるを厭ふべからず。
- 一、相互に絶対無限の義務に服し自ら進んで自己を主張すべからず。

「国土館内に経理部、師範部を置き、更に郷里福岡県に8ヶ所の支部を設け」、啓蒙活動・情宣活動もおこなったが、運動資金にいきづまった下位はイタリアに旅発ってしまう。しかし、「日本に残された青年達は、細々乍ら不撓不屈の意気を以って下位氏の志を嗣いで興国運動に従事して居」た^{*65}。儒教的な匂いをただよわせる「教条」には、このころ量産していた講演録にみられる下位のフィウーメ主義とムッソリーニ主義がよく反映されている。ファシズムを精神主義的な皇国主義のなかに活かすというのが下位の目論見であったであろうが、ついに所期の目的を果たすことはできなかった。

下位は、イタリアから最終的に帰国して以降、司法省刑事局の思想取締対象者となった。1940年頃までをカバーした刑事局内部資料には下位の生年月日・本籍地・出生地・現住所・学歴・活動歴などが記載されている。それによれば、一時帰国中の下位が国土館大学教授兼国土館中学校長であったことがわかる。資料にはないが、最終的な帰国後には東京中央放送局（現NHK）で海外放送イタリア語部長、国際連盟教育映画部日本代表、さらには日本農林新聞社長に就任している^{*66}。また、日伊相互の文化交流・親善団体である日伊学会（名誉会長はアウリッチ伊大使、会長に男爵大倉喜七郎）の評議員のなかには下位の名もみえる^{*67}。

さらに資料は、社会運動・思想運動について、全国への興国運動、祖国会機関紙への執筆、朝鮮各地への講演、建国会本部の弁士、日本革新党第2回大会参与、全国青年連盟相談役、やまと新聞への寄稿、日本革新青年隊での欧州情勢説明、興亜議会顧問などとしての下位の活動

を記す。なかでも注目すべきは頭山満の紹介によって出口王仁三郎と会見し、「同人主宰に係る昭和神聖会の創立に尽力」したという記述である^{*68}。

出口王仁三郎といえば、宇宙万物の創造主神であるおほもとすめおほかみ大本皇大神を祭神として四大主義（清潔主義・楽天主義・進展主義・統一主義）の生活実践を説く教派神道・大本教の教祖（開祖は出口なお）だが、歴史叙述のなかでは、国家からの二度におよぶ大弾圧（大本事件）によってよく知られている。そのうち第二次大本事件（1935年12月）は、1934年7月に発会した昭和神聖会の活動が直接的な原因となった^{*69}。昭和神聖会は結成1周年を機に陣容を整えるが^{*70}、このとき新設した統管直属の参謀長に下位が任ぜられたのである^{*71}。昭和神聖会は大本教のような宗教運動ではなく、皇道宣揚運動という治教であるとされたが、はたして下位が、昭和神聖会の霊的な真義を十全に理解していたのか、疑念が残る。神聖会のいう皇道維新は下位の抱懐するファシズム理念と合致するものであったのか。もっとも、神聖会の唱えた皇道経済とは「土地為本、天産物自給経済」という農本主義を想起させるものであるが、国家弾圧から1年数箇月後の朝日新聞には、朝鮮から戻った下位もまた、彼の地で宇垣一成（朝鮮総督）がはじめた農村振興運動が「着々と奏効してゐるのは素晴らしい」と発言している。「農村の振興へ 一身を打込んで旅から旅へ」という大見出しの下には、「日本に帰ってから5年、新興イタリーの紹介とファシズムの講演行脚にその儘文字通りの寧日のない日を送ってゐたが、最近この講演も断って農山漁村の実態調査に心を打込んでゐる」と下位の近況が報じられ、日本の農業政策へのつよい懸念を吐露していた^{*72}。

政治活動一色に染まったかにも見えるこの頃の下位だが、1937年には「伊國に紹介されたる日本文學」と題するエッセイを、自誌『サクラ』の解説を中心にまとめた^{*73}。また、1944年刊行の『日伊文化研究』では、3回にわたり、イタリア各地の守護聖人について実生活者の視点から平易に解釈した「伊國宗教説話」を連載している^{*74}。これは下位春吉が帰国後にみせた数少ない文人の顔であった。下位は往々にして「詩人」という冠をつけて紹介されたが、下位の書いた詩篇は見つかっていない。「詩人」と呼ばれることで、自らを何と重ねようとしていたのであるか。下位は、自己の実人生を、散文的にではなく韻律正しく詩的に生きる永遠の「青年」として描きたかったのであるか。

むすび

以上、本稿では、政治的行為者としての下位春吉が、ダンヌンツィオ、ムッソリーニ、ファシズムから受けた

影響、および日本でみせたその移植宣伝活動を中心に概観してきた。

最後に、米国による核の傘の下に庇護され、20世紀末期の受動的「平和ボケ」状態だった日本に下位の存在をあらためて知らしめた功績をみとめられる田之倉稔のつぎの一節を紹介して稿を閉じよう。

下位もダヌンツィオに魅せられ、心酔したひとりだった。しかし詩人の遊戯性、あるいは演戯性への無邪気な共感からやがてファシズム・イデオロギーへの承認という、引き返しの難しい地点へと彼は踏みこんでしまうのである。訪伊の目的であったダンテ研究は、いつしかムッソリーニを日本に紹介することとかわってしまった。外国の同時代文化へコミットするときの陥穽がここにはある。外部のものには、研究対象の国における、同時代精神の対立抗争の地勢が読めないからである。ノ古典研究を目的とした伊太利滞在が、フィウメ占領体験と重なって、ひとりの日本のファシストが生み出される過程を発見することができる。外国の同時代文化・政治を支えている中心的精神に対して、その自己同一化をはかり、自分の思想を投影するサンプルが下位春吉の場合であった^{*75}。

田之倉はこのように書くが、下位は果たして、「外国の同時代文化へコミット」したために、外因的な「陥穽」にはまったのか。この場合、「陥穽」という言葉から読者がイメージするのは、世界的にも最高級の宗教・哲学性をもつ文学とみなされるダンテ文学の研究（を志す）者から、ムッソリーニ＝ファシズムという典型的な世俗的権威主義国家体制を擁護・喧伝する生々しい政治的プロパガンダディストへの変節という罫あるいは落とし穴である。だが、ダンテこそ13 - 14世紀フィレンツェの政争の渦に巻きこまれ、追放・亡命生活をしいられた文人だった。傑作詩篇『神曲』もこの政治的経験がなければ誕生しなかったことを想起すれば、下位の場合、文学（性）と政治（性）とのネガ・ポジの表出は外因性によるというより、内奥に積みあがった下位春吉の個人史的素地に決定づけられたといえるのではないか。つまり、田之倉のいう「陥穽」（落とし穴）や当時のイタリアの「中心的精神」への「自己同一化」は、つよい内因性により、訪伊以前すでに下準備されていた。なぜなら、本稿の冒頭に紹介したように、国民国家揺籃期に維新第二革命の狼煙をあげた秋月の乱に関係した実父をもち、父母兄弟全員が炭鉱坑夫となって貧苦の幼少年期を送った下位^{*76}が秋月拳兵50周年祭に記念講演をおこない、くわえて乱の内実を克明に綴った史書に、ガリバルディやダンヌンツィオの台詞を髣髴させる題字「興国乎 死乎」^{*77}

を捧げた事実は、下位が「秋月党の悲史」を忘れていなかったことを如実に物語っているであろうからである^{*78}。そう考えれば、ダンヌンツィオへの「無邪気な共感」やムッソリーニとの接触によってたやすくはまった「陥穽」という表現は、あまりにモダニズム的ではないか。

別言すれば、1900年前後から第2次世界大戦後しばらくまで、極度の経済的困窮のなかで育った少年が、世の中の政治的・社会的・経済的矛盾を強烈に感じとった先に見据える選択肢とは、自暴自棄となり無軌道な零落の途をたどるのでないならば、(1) 立身出世、(2) 階級意識（マルクス主義）、(3) 国家主義^{ナショナリズム}の3種に大別できるであろう。大杉栄や荒畑寒村とほぼ同世代だが、英語とイタリア語の習得に励み、早くして婿養子に入った下位にはマルクス主義に目覚める余裕も機会もなかったであろうし、ましてや至誠報国と天皇鳳下に一命を捧げた秋月憂国の士^{ナショナリズム}の精神を父親から多少とも継いでいたのであれば、時流に迎合するような立身出世主義も肯定できず、共和主義と国家の廃絶を唱道する社会主義や無政府主義にいたってはむしろ敵対物であった。したがって、社会の变革をころざした多くの日本の青年たちと同様、下位も自然、自己のルサンチマンを国家主義に転化させたのではないだろうか。だが、私見によれば、近代の獲得ないし近代の完成をめざしたイタリア＝ファシズムと、近代の超克を金科玉条として崇めた日本＝超国家主義との融合・合一はそもそも不可能であった。両者の相違を見落としていたところに下位の「陥穽」があったのではないか。

1952年1月にインタビューしたモンタネッリによれば、下位は枢軸陣営への支持煽動（*propaganda in favore dell'Asse*）により1951年まで公職追放を甘受させられた^{*79}。同年9月にサンフランシスコ講和条約が締結され、翌1952年4月末の発効によって、公職追放令は完全に廃止される。下位は1951年5月に実施された第1次公職追放解除で自由の身となったのだろう。しかし、それから3年後の1954年12月、おそらくは失意と絶望のうちに没した。死の直前の同年5月、国連管轄下に自由地域であったトリエステがイタリアに返還された。トリエステは下位がアルディーティとして参戦し第1次大戦の終結の日を迎えた前線トレントの東方200kmに位置し、トレント同様、回復されざるイタリア（Italia irredenta）としてイタリア国民のナショナリズム^{ナショナリズム}を煽ったイッレデンティズモ^{イッレデンティズモ}（irredentismo）にととの聖地だった。インタビューのなかで、下位は沈鬱な表情をみせながら、「いわば、人間のすることはすべて無意味だ（fesseria）」と漏らしたという^{*80}。

注

- *1 川上水舟『秋月黨』秋月郷土館、1991年（第4版。初版は1925年）。
- *2 同上、275頁。
- *3 同上、157-165頁。乱の裁判につき、さらに精緻な研究では、斬罪2人、除族懲役144人、除族2人、懲役7人、贖罪金（贖金）4人、懲役贖罪金1人とされる。この研究によれば、福岡臨時裁判所で385人、長崎裁判所で25人、計410人が裁判に付された。田村貞雄『秋月の乱口供書について』『福岡県地域史研究』第25号、2009年。
- *4 川上水舟『秋月黨』、280頁。
- *5 次書巻末の「黒田藩土族知行高調」の一覧表より。田尻八郎『筑前秋月のこころ』創言社、1970年、257頁。
- *6 下位春吉『大戦中のイタリア』信義堂書店、1926年、263頁；『東京朝日新聞』（夕刊）、1937年3月6日。記事は「詩人・下位春吉さん」と紹介する。
- *7 『ふるさと人物記』夕刊フクニチ新聞社、1956年、578頁。記事の冒頭、「日本漫画映画会社会長下位春吉」とある。
- *8 大阪児童文学館『日本児童文学大事典』第1巻、大日本図書、1993年、372-373頁。
- *9 日本児童文学界『児童文学事典』東京書籍、1988年、363頁；倉澤栄吉「お凧の仕方」上笠一郎・富田博之編『児童文化叢書 解説編』大空社、1988年、113頁。1年後輩の葛原の方は「お母さん」と呼ばれたという。
- *10 倉澤栄吉、前掲、1140-115頁。だが、うがった見方かもしれないが、戦後に公職追放となった下位であるゆえに、その文化活動の出発点となった非イデオロギー的な大塚講話会の創始者・推進者そして快作『お凧の仕方』もが日陰の位置に追いやられたとみることのできるのではないか。もちろん、倉澤はそれについて触れていないし、軍国主義プロパガンディストのイデオログ下位春吉に言及することもない。他方、倉澤は「大人の話し方」について、「何といっても明治期の大人の話し方の横綱は、馬場辰猪の『雄辯法』である。この書物は、ハウツウものではなく、しっかりとした理論にもとづき、主として西洋の雄弁法に依拠して、弁舌法の中核を解明した文献である。下位がこの本を読んだであろうことは想像に難くない」と書いて、明治民権運動に活躍した馬場辰猪の記した雄辯法と下位の口演法との影響関係という興味ぶかい指摘をおこなっている（同、116頁）。
- *11 残念ながら、下位による公表されたダンテ研究はみあたらない。もっとも、1920年2月7日の読売新聞は、「ダンテ記念館を東京に新設する計画。発起人は伊太利留学中の下位氏」という見出しで、下位が発起人となって東京にダンテ記念館を設立する計画があると報じ、建築考案を委嘱するイタリア人彫刻家の名もあげていた。明治大正昭和新聞研究会『新聞集成 大正編年史』大正9年度版・上、1982年、434頁。
- *12 ローマの国立中央図書館が発信するアーカイヴの文章によれば、マローネはフィレンツェの高名な文化誌『ラ=ヴォーチェ』（*La Voce*）や『ラチエルバ』（*Lacerba*）とも親交があった。1914年に自身で刊行をはじめた『ラ=ディアーナ』は、マリネッティ（Filippo Tommaso Marinetti）やソッフィチ（Ardengo Soffici）などの未来派や、ヴェリズモ派のディジャーコモ（Salvatore Di Giacomo）、文芸誌『ヘルメス』（*Hermes*、1904-1906）主宰者で作家のボルジェーゼ（Giuseppe Antonio Borgese）、孤高のユダヤ系詩人サーバ（Umberto Saba）、そしてイタリア現代詩の高峰ウンガレッティ（Giuseppe Ungaretti）らの錚々たる寄稿者を有していた。
<http://www.bnrcrm.librari.beniculturali.it/index.php?it/397/archivio-g-marone-in-deposito>
- *13 クローチェは、エッセイ「日本人の友人の思い出と書簡」で、日本の『ダンテの家』（*Casa di Dante*）のためにダンテ関連のものを集めていた下位に、関連する小さな絵（quadretto）をプレゼントしたという。また、夫がイタリア人女性教師に熱を上げていることを知った下位の妻が下位を日本につれて戻った事件も紹介している。このことと下位の帰国との関連は不明である。さらに、「突如現出したファシズムが下位の精神を輝かせた。新聞に掲載された下位の政治講演を読んだが、下位は、わたしを非イタリア人で（反国家的）（non-italiano e antinazionale）と当時の表現で規定していた。この宣告（sentenza）はひとりの日本人から発せられたのであるが、それはまったくもって本質的な皮肉であった」と非常に印象的な回想を残している。（*Quaderni della "Critica" diretti da B. Croce*）, agosto 1946, n.5, pp. 110-111, in: <http://ojs.uniroma1.it/index.php/quadernidellacritica/article/viewFile/2664/2661>
- *14 “Sakura”の全目次は次のサイトを参照。
<http://venus.unive.it/aistug/database/sakura.html>
- *15 Isabella Brunetti, “Shimoi Harukichi e la mediazione della cultura giapponese a Napoli e in Italia”, in:

- (a cura di) Adolfo Tamburello, *Italia- Giappone. 450 anni*, vol. 1, Roma- Napoli, Istituto Italiano per l’Africa e l’Oriente Roma e Università degli Studi di Napoli “l’Orientale”, 2003, pp. 380-386; Marisa Di Russo, “Dal giapponismo letterario alla letteratura giapponese”, in: *ibid.*, pp. 392-404; 土肥秀行「下位春吉とナポリ文芸誌『ラ・ディアーナ』 下位春吉伝 (上)」『イタリア図書』 n. 39、2008年；同「下位春吉とナポリ文芸誌『サクラ』 下位春吉伝 (下)」同上誌、n.40、2009年；大内 紀彦「イタリアにおける下位春吉の活動 雑誌『サクラ』による日本文学紹介を中心に」『イタリア図書』 n. 41、2009年；同、「イタリアにおける下位春吉の活動(2) 雑誌『サクラ』創刊をめぐるメディア状況と詩友群像」同、n. 43、2010年。
- *16 Harukichi Scimoi, *La guerra italiana. impressioni di un giapponese*, Napoli, Libreria della Diana, 1919；下位『大戦中のイタリア』前掲。伊語版は92頁、日本語版はその4倍の分量の370頁にのぼる。伊語版を大幅に補筆・加筆したものが日本語版といってよい。
- *17 下位『大戦中のイタリア』前掲、176頁。このウィーン遠征は、朝9時20分、「7機の胸から投下せられたるは、殺戮の爆弾にあらずして、色彩優しう、緑と白と赤と、伊国の3色に染め出したピラの幾百万葉」。独文のピラには、「我等イタリア人が戦ひを交ふるは、無辜の児童、老人、婦女子を屠らむがためにあらず。[略] 盲目的にして、且つ頑迷残忍なる汝等の政府を倒さむがため也。[略] 自由万歳！ / イタリア万歳！ / 連合万歳！（1918年8月9日）」と記してあった（同、192-194頁）。
- *18 下位へのある追悼文によれば、“*Corriere del Mezzogiorno*”紙の通信員としての資格であったという。Marcello Muccioli, “Un grande amico dell’Italia: Harukichi Shimoi”, in: (*Giappone*), a.I, n.1-2, luglio-dicembre 1957, p. 39. また、下位は上院議員のデ＝ロレンツォ (G. De Lorenzo) に戦場レポートを送り、それが同じくナポリの地元紙“*Mattino*”で報じられた。Marisa Di Russo, “HARUKICHI SHIMOI: il giappone amico di d’Annunzio”, in: (*Rassegna dannunziana*), n. 34, dicembre 1998, Centro Nazionale di Studi Dannunziani in Pescara, p. XXVIII.
- *19 下位春吉「滞伊18年。ダンヌンツィオとムツソリーニを語る」『現代』第14巻第7号、1933年7月号、48-50頁。
- *20 詳しくは、拙著『原初的ファシズムの誕生』（御茶の水書房、2007年）の第2章を参照。
- *21 Indro Montanelli, “Shimoi” in: Id., *L’impero bonsai*, Rizzoli, 2007, p. 167; Id., “Shimoi”, in: Id., *Gli incontri*, BUR, 2004(1961), p. 315. (以後、本稿での引用はRizzoli版による)。
- *22 cf. Marisa Di Russo, “HARUKICHI SHIMOI”, cit., XXX.
- *23 Indro Montanelli, *op.cit.*, p. 167.
- *24 Marisa Di Russo, “HARUKICHI SHIMOI”, cit., p. XXVIII.
- *25 下位『大戦中のイタリア』前掲、176頁、および下位春吉「ダンヌンツィオの横顔」『改造』1938年4月号 (vol. 20, n. 4)、455頁。なお、「小説家のベルトラメルリ」とは詩人・作家でジャーナリスト、またナショナリストでファシストだったアントニオ＝ベルトラメルリ (Antonio Beltramelli) とみられる。cf. Indro Montanelli, *op.cit.*, p. 168.
- *26 下位春吉「人間ダンヌンツィオ」『日伊協会会報』第3号、1943年、42頁。
- *27 また、下位とダンヌンツィオとの初対面を1919年初旬と予測する見解もあるが、これは考えにくい。cf. Vito Salierno, “Il mancato volo di D’Annunzio in Giappone”, in: (a cura di) Elena Ledda e Guglielmo Salotti, *Un capitolo di storia: Fiume e D’Annunzio*, Roma, Lucarini, 1991, p. 156.
- *28 下位は飛行場の在所をサン・ニコロー（聖ニコロ）島と表記しているが（『ダンヌンツィオの横顔』前掲、455頁）、これは誤り。聖ニコロ飛行場はリド島西端部にあった。ちなみに、この飛行場は仏軍所有で、ダンヌンツィオにも使用が許されていたといったほうが適切だろう。
- *29 下位『大戦中のイタリア』前掲、177-179頁。
- *30 同、266-270頁。
- *31 下位「滞伊18年。ダンヌンツィオとムツソリーニを語る」前掲、54頁。
- *32 同、54-55頁；Marisa Di Russo, “HARUKICHI SHIMOI”, cit., XXVIII- XXX.
- *33 ロンキの現在の名は、フリウリ - ヴェネーツィア = ジューリア州ゴリツィア県の「ロンキ＝デイ＝レジョナーリ」(Ronchi dei Legionari) つまり、義勇兵のロンキである。このロンキ進軍にちなんで現在の市名となった。
- *34 “Saluto all’ospite d’Oriente” in: Gabriele D’Annunzio, *La penultima ventura*, (a cura di) Renzo De Felice, Milano, Mondadori, 1974, pp. 200-202. 9月13日に出発を予定していた日本への飛行の3日前、アメリカによるフィウーメ介入の報を聞いたダンヌンツィオは驚いて飛行計画を中止し、ロンキ行進に至るのだが、「私も一緒に付いて行った。途中から千人ば

- かりの熱血青年達が付いて来て、フューメに飛び込んで行った」といった記述から、あたかも下位がロンキ行進に参加したような印象を与えるが、これは事実ではないだろう。下位春吉『ファッショ運動とムッソリーニ』文明協会、1937年、56-57頁。
- *35 Gabriele D'Annunzio, *La penultima ventura*, cit., p. 537.
- *36 “Saluto all'ospite d'Oriente” in: Gabriele D'Annunzio, (a cura di) Ferdinando Gerra, *L'impresa di Fiume. Nelle parole e nell'azione di Gabriele d'Annunzio*, Milano, Longanesi, 1966, pp. 278-280.
- *37 下位「滞伊18年。ダンヌンツィオとムッソリーニとを語る」前掲、55頁。
- *38 この歓迎スピーチは、フィウーメの情景を語る一場面として、それほど大部ではないダンヌンツィオ伝でもとりあげられている。cf. Piero Chiara, *Vita di Gabriele D'Annunzio*, Milano, Mondadori, 1992 (1978), pp. 323-324.
- *39 その一例がフィウーメ連盟 (Lega di Fiume) である。これは、抑圧者 = 帝国主義列強が結託した国際連盟 (Società delle Nazioni) に反対し、被抑圧・植民地の諸民族の解放を目的につくられた。フィウーメ連盟の結成には、ベルギー人の詩人コホニツキー (Léon Kochnitzky) が貢献した。cf. Giordano Bruno Guerri, *D'Annunzio. L'amante guerriero*, Milano, Mondadori, 2009(2008), pp. 249-251.
- *40 他方、イタリアにおける文学研究では、ダンヌンツィオの新たな一面を知る材料として下位の著作が注目されているようである。cf. Felicità Valeria Merlino, “Il sodalizio Shimoi - D'Annunzio”, in: *Italia-Giappone. 450 anni*, vol. 1, cit., pp. 387-491.
- *41 『サクラ』(Sakura) 全5冊の発行月は、 - 1 (1920年6月)、- 2 (7月)、- 3 (8月 - 9月)、- 4 (10月 - 11月)、5 - 6 (12月 - 1921年3月) である。http://venus.unive.it/aistug/database/sakura.html
- *42 たとえばつぎのような部分に認められる。「ダンヌンツィオの芸術については今原田 [謙次] 先生から詳しくお話がありました。ダンヌンツィオの詩人としての功績を称へることは、私の柄にもないことであります」(「人間ダンヌンツィオ」前掲、42頁)。
- *43 1920年9月に制定されたカルナー口憲章は革命的サンディカリズム路線の結晶であろう。このあたりについては、拙稿「フィウーメ占領期にみる革命的サンディカリズム A・デアンプリスとカルナー口憲章」『駿台史学』第113号、2001年、を参照。
- *44 cf. Giordano Bruno Guerri, *op.cit.*, p. 257; Antonio Spinosa, *D'Annunzio. Il poeta armato*, Milano, Mondadori, 1987, pp. 172-173.
- *45 下位春吉「滞伊18年」前掲、56頁。
- *46 下位春吉『ファッショ運動とムッソリーニ』文明協会、1927年、96頁。ムッソリーニは自紙『イタリア人民』でフィウーメ救済の義捐金を募ったが、これを着用していると疑念を抱く声は小さくなかった。
- *47 Montanelli, “Shimoi”, cit., p. 168. ダンヌンツィオにとってムッソリーニは粗野な田舎者 (cafone) だった。下位は書簡配達人 (messaggero, postino) であり、日本人 = 外国人であるために変装する必要もなかった。下位は、互いに相手を嫌っていたが互いを必要としていたダンヌンツィオとムッソリーニとの関係を繋いだひとりだったといえよう。両者は折り合いが悪く、互いに軽蔑的な調子だったことを下位はわかっていたとする論者もいる。Felicità Valeria Merlino, *op.cit.*, p. 388.
- *48 Montanelli, “Shimoi”, cit., p. 169.
- *49 Di Russo, “HARUKICHI SHIMOI”, cit., p. XXX. 宗教史家ペッタッツォーニ (Raffaele Pettazzoni) は、1931年12月に倫理宗教向上協会 (ASPROMORE: Associazione per il progresso morale e religioso) で日本の宗教と迷信にかんする下位の講演を聞いたという。cf. Mario Gandini, “Raffaele Pettazzoni nelle spire del fascismo (1931-1933)” in: *Strada maestra*, 1° semestre 2001, p. 56. cf. http://www.raffaelepettazzoni.it/ARTICOLI/Strada%20Maestra%2050.pdf
- *50 下位『ファッショ運動とムッソリーニ』前掲、96-97頁。
- *51 下位春吉『イタリアの参戦を回る世界政局の動向』日本協会、1940年、4-5頁。
- *52 下位春吉『ムッソリーニの獅子吼』大日本雄辯會講談社、1929年。同書には頭山満への謝辞と、「わが友下位君は、初めは大戦の塹壕の中において、後には内乱の紛糾の間に立って、ファッショ主義の更正を、自ら新しく生活し来りし人である」などと書かれたムッソリーニの自筆序文が収められている。なお、下位訳のムッソリーニ著には次書もある。ベニート = ムッソリーニ『これが伊太利軍だ。1915年~1918年伊太利戦に対する外人の証言』グリエルモ・スカリーゼ (伊太利大使館付陸軍武官、出版者)、1935年。
- *53 “Una commissione di deputati giapponesi da Mussolini”, (Il popolo d'Italia), n. 219, 13 settembre 1922, IX, in: (a cura di) Edoardo e Duilio Susmel, *Opera omnia di Benito Mussolini*, Firenze, La Fenice, 1972(1956), pp. 543-544.
- *54 下位は、ムッソリーニは未来派の詩人であり音楽家でもあるなどと虚実を織りまぜ、ファッショ運動を

- 芸術運動とオーバーラップさせるような発言もしている。cf. 下位「滞伊18年」前掲、57頁。
- *55 下位はフィウーメ主義（ダンヌンツィオ）とファシズム（ムッソリーニ）を結びつけるために、まったくの虚偽発言もはばからなかった。たとえば、フィウーメを去った3万の青年はダンヌンツィオとともにミラーノのムッソリーニに向かったが、ダンヌンツィオ自身は隠遁し、若いムッソリーニを新しい指導者に推薦したなどと放言している。下位春吉『ファッショ運動』民友社、1925年、46頁。
- *56 下位は後年、青年とは「戸籍簿本の生年月日の数字に依る青年」ではなく、「国難に殉ずる精神と祖国の危機を見て蹶起せざるを得ない熱意とを持ってゐる者を称して、青年と謂ふ」としたムッソリーニの発言を借用して定義した。「ムソリーノの横顔」ミルコ＝アルデマーニ、下位春吉『今日のイタリア』大民社、1940年、24頁。なお、共著者のアルデマーニ（Mirko Ardemagni）は駐日イタリア大使館情報官で、元ファシスト行動隊員（squadrista）かつ『イタリア人民』紙の元特派員である。
- *57 cf. 下位春吉『昭和の青年と世界の展望』日本書莊、1937年。
- *58 「日本の忠君愛國主義に、黒シャツを著せ、マンガネルロ〔棍棒、manganello〕を持たせたものだと思ふ」。下位『ファッショ運動』前掲、19頁・35頁。他方、ファッショ運動は精神運動、一種の信念・信仰の運動だとも述べる。同、9頁。
- *59 下位春吉「下位春吉氏 熱血熱涙の大演説」『キング』第9巻第10号付録、1933年、78-87頁。また、「第一は祖国、国家（パートリア）、第二は義務（ドベレ）、第三は訓練、規律（ディシプリーナ）」とも表現している。下位『ファッショ運動』前掲、10頁。
- *60 下位「下位春吉氏 熱血熱涙の大演説」前掲、63頁。
- *61 同、30頁。
- *62 cf. 下位春吉「O.D.N.を語る」『日伊文化研究』第3号、1941年、104-105頁。大衆のファシズム化およびファシズム体制の大衆組織化を考えると、ドーボラヴォーロ（事業団）の存在は重要である。cf. ヴィクトリア＝デ＝グラツィア『柔らかいファシズム』有斐閣、1989年。
- *63 下位春吉『ファッショ・イタリアの社会事業』ミルコ・アルデマーニ（発行者）、1940年。
- *64 下位春吉『伊太利の組合制国家と農業政策』ダイヤモンド社、1933年。その他、産業・労働分野にかんする下位の著作には次がある。『ファシズムの真髓と伊太利の産業統制』（大阪図書、1933年）、『伊国の産業政策と労働憲章』（関東産業団体研究会、1933年）、『ファッショ政体に於ける労働政策』（春秋社、1932年）、「ムッソリーニの伊国産業政策」（『工場研究』37、1927年）。
- *65 石川龍星『日本愛國運動総覧』東京書房、1932年。
- *66 大阪児童文学館『日本児童文学大事典』前掲、372頁。
- *67 「日伊学会会報」第2号、1938年。
- *68 奥平康弘編『昭和思想統制資料』第18巻（上）、生活社、1980年、315頁。
- *69 昭和神聖会の創立声明には、「方今国際情勢愈々紛糾し、皇国日本の前途に重大なる危機を孕み、国内の不安益々深刻にして〔略〕。天地の大道、皇道の精神を忘失して、外来文物制度に侵毒せられたるに由る。〔略〕皇祖の大神勅を奉戴し、皇業を翼賛し奉り、神州日本の美し国を招来せんと誠心奉公を誓うとあった（泉田瑞頭『救世主 出口王仁三郎』心交社、1986年、172頁）。また、「王仁三郎の説く天皇論は、〔略〕主師親三徳兼備の理想像たる天皇である『スメラミコト』である。この理想天皇の行う政治が皇道であり、皇道経済であり、皇道教育である。〔これに反し、現在の〕神聖皇道を無視した人間絶対の天皇統治は盤古天皇制であって真の皇道神政ではない」とした（同、175頁）。統管には王仁三郎が、副統管には黒龍会の内田良平らが就任しており、創立発会式（1934年7月、軍人会館）では、政治家、軍人とならび頭山満が祝辞を述べた。頭山は会の顧問にもなっている。
- *70 創立1年にして会員・賛同者は計800万人にのぼった。だが、^{あらひとがみ}現人神の統治という既存の天皇制国家はこれを脅威とみて不敬罪の罪名により弾圧にかけられ、神聖会の国家改造運動は本体である大本教の徹底的な解体をもたらすことになる。なお、このあたりの記述は同上書第4章に依拠している。
- *71 同、181頁。司法省刑事局「思想月報」中の「国家主義系団体員の経歴調査」（其18）によれば、下位は「昭和9年5月頭山満の紹介に依り出口王仁三郎と会見し、同人主宰に係る昭和神聖会の創立に尽力し、其の最高幹部の一人となり後昭和10年2月28日同会参謀長となり爾来同会の為全国各地に講演旅行を為せり」と記述されている。「思想月報」第78号、1940年12月、参考文献懇談会編『昭和前期 思想資料 第1期』文生書院、1973年、392頁。
- *72 「その後の消息」『東京朝日新聞』（夕刊）、1937年3月6日。
- *73 下位春吉「伊國に紹介されたる日本文學」『書祭』（人）、書物展望社、1940年、21-25頁。

- *74 下位春吉「伊國宗教説話」(1) - (3)、『日伊文化研究』第4、5、7号、1942年。
- *75 田之倉稔『ファシストを演じた人びと』青土社、1990年、121-122頁。田之倉は別書でもつぎのように記述している。「下位が古典文学の研究者より、確信的なファシストになるほうが、イタリアの現代に忠実であると考えたとしても、無理からぬ話である」。同『ダヌンツィオの楽園』白水社、2003年、96頁。
- *76 下位は3歳から筑豊炭田の「鞍手郡の一炭鉱」に育ち、せめて4人兄弟の末弟の春吉だけでもと学校にやらせてくれたと書いている。下位『大戦中のイタリア』前掲、263頁。
- *77 下位の題字「興国乎 死乎」とは、連合軍支配下にあった第1次大戦直後のフィウーメにたいするイタリア人の無関心に激したダヌンツィオが煽動演説や檄文などで好んで用いた台詞「イタリアか、死か」(Italia o morte!) および「フィウーメか、死か」(O Fiume o morte!) の模倣であった。だが、それもまた、歴史的来歴をもつ模倣であった。すなわち、イタリア国家統一の英雄ガリバルディ (Giuseppe Garibaldi) が、イタリアの国家統一後に残されたローマのイタリア編入をめざし、千人隊行動後の1862年7月、再度上陸したシチリア島パレルモで「ローマカトリック [教会] を庇護するナポレオン3世を打倒せよ」と民衆に訴えると、民衆は「ローマか、死か」(O Roma o morte!) と歓呼して応えた。感銘をうけたガリバルディは、この言葉を自身の演説のなかで頻繁に使った。このスローガンはただちにイタリア再統一のスローガンとして全土に流布したが、ダヌンツィオの台詞もここに由来するのである。

*78 さらに補足するなら、下位が1916年9月、訪伊して1年に満たない頃に書き終えた『お嘶の仕方』の例話「ごんざ蟲」には、「日本は強い、世界で一番強い。と皆申しますし、私も全く然うであると信じてをります。日本は支那と戦争しても勝った。ロシアにも勝った。近くはあの強いドイツをも打破った。[略] が併しその名誉ある大勝利の後の日本の有様はどうです。国は益々貧乏になる。借金は殖える。この儘の勢ひで行ったら、40年、50年、100年の後には、戦争で世界一の日本国は、戦争をしないで、笑ってゐる間に滅びるかも知れない様な有様ではありませんか。[略] 銃を持っては世界一の日本の国は、算盤を持っては極めて弱いのです。[略] 人殺しの戦争で世界一の日本人は、同時に亦金儲けの戦争でも世界一の強国にならねばならぬと思ひます」(下位春吉『お嘶の仕方』同文館、1917年、400-402頁) とある。例文は、下位独自の口話の指導法にしたがい、教訓を枕にして疑問法や具体法などの例をあげているのだが、下位の滞在するナポリも第1次世界大戦の戦争色一色に染まっていたとでもいうのか、日本は軍事(人殺し) 大国から、軍事(人殺し) 大国+経済(金儲け) 大国へと進まなければならないというものであるから、かなり好戦的で政治的な文章である。もちろん、当時の下位はダヌンツィオともムツソリーニともまだ知り合っていなかった。

*79 Montanelli, "Shimoi", cit., p. 169.

*80 *Ibid.*, p. 170.

*引用・参照したホームページアドレスは2011年1月時点で閲覧確認したものである。

Summary

This paper deals with the political side of Shimoi Harukichi (1883-1954), who is almost unknown to the world nowadays, but in the years of 1915-1921 he translated many Japanese contemporary poems and novels into the Italian language, introducing them to the Italian literary circles. On the other hand, Shimoi went to the battlefield as a *filo*-Italian soldier between Italy and the Hapsburg Empire in World War 1. He came to be a nationalistic revolutionary by getting acquainted with Gabriele D'Annunzio, and became a perfect fascist after coming into contact with The "Duce," Benito Mussolini. After returning home, Shimoi acted positively so as to diffuse and import Italian fascism into the Japanese society. However, he failed because of the defeat in World War 2.